

総合的学習のカリキュラム評価 館山市立北条小学校(卒業式第二部)の分析

The Evaluation of Curriculum of The Overall Study
Analysis of Houjou Elementary School in Tateyama, Graduation Ceremony

白杵 美紀 (Miki Usuki) 指導：野嶋 栄一郎教授

【背景】

2002年度より総合的学習が全国の小・中学校で実施され、各学校の実態に即した学習展開が期待されるなか、教師にはカリキュラムを自ら開発することが求められている。その典型例として、学校を基盤にしたカリキュラム開発(SBCD)があげられる。SBCDは実践・批評・開発モデルに基本視点をおく。実践・批評・開発モデルとは子どもに即し、学習を援助する教師の実践過程を基礎とする開発様式である。そのようなカリキュラム開発を長年行ってきた学校として、館山市立北条小学校(以下北条小学校)があげられる。北条小学校には「北条プラン」とよばれる独自のカリキュラムの構想がある。北条プランは戦後復興期に成立し、4～5年ごとに児童・教師・地域・時代のニーズに合わせて改定が行われている。この北条プラン改定の過程で、「統合学習」とよばれる総合的学習と非常に大きな接点を持つ学習が20年以上前に誕生し、現在に至るまで実践が続けられてきている。

【目的】

館山市立北条小学校で行われた総合的学習の一単位である「卒業式第二部」の展開過程に着目し、児童がどのような学習を経験しているかを明らかにする。そして、総合的学習が学習の場としてどのように機能しているかを考察することを目的とする。

【研究方法】

観察した授業

第6学年の総合的学習の一単位である「卒業式第二部」を観察した。「卒業式第二部」は実行委員会という児童6名、教師1名からなる組織を中心として卒業生全員が自らの手で卒業式を作り上げていくものである。

記録方法

2003年1月13日～3月18日に行われた総合的学習の時間及び実行委員会をビデオカメラ(3台)、NTレコーダー等を用いて記録した。また授業終了後、教師へのインタビューも行った。

分析方法

授業観察よりえられた児童の活動、教師の働きかけに関するデータを分類、児童の学習経験を記述した。さらにこれらのデータをもとに教師へのインタビューを実施した。

【結果】

授業観察よりえられたデータを分類した結果、以下の点が明らかになった。

- ・本単元は、実行委員会を中心としながら、児童全体が主体的に学習活動を展開していた。
- ・国語・図工・道徳といった要素を含んだ学習であった。
- ・学校行事と関連をもたせて効果的に学習を展開していた。
- ・教師は特に国語・道徳・音楽など教科と関連した点に力を入れて指導を行っていた。

つまり、本単元は児童が主体的に学習活動を展開しながら、教科・道徳等で培った力を統合する場として機能していると評価することができる。また、教師へのインタビュー結果から、そのような学習展開が可能なのは、多くの児童が本単元においても組織された「実行委員」を6年間の学校生活の中で繰り返し経験する中でリーダー、フォロワー両方の意識が育っているということが指摘された。授業終了後に行った質問紙による調査の結果からも、実行委員会では平均で年間約12回組織されており、70%の児童が2年の間に最低1度は実行委員を経験したことがあるということが明らかとなり、多くの児童にリーダーを経験する機会があるということができる。

【考察】

本研究より、総合的学習は児童が学習を主体的に展開しながら、教科等で培った力を統合する場として機能することが可能であるということが明らかになった。また総合的学習がそのように機能するためには、総合的学習の実施を教科学習と区分してとらえるのではなく、既存の教科とも関連付けながら、学校全体のカリキュラムについて検討する必要がある、さらに1つの授業・1つの単位といった単位でのカリキュラムを考えるだけではなく、より長期的なカリキュラム構想を持つ必要がある。

【参考文献】

- 千葉県立北条小学校・早稲田大学人間総合研究センター
編著 「ふだん着の総合学習」第一法規
佐藤学 「カリキュラムの批評—公共性の再構築へ—」
世織書房 (1996)